

インドネシア、バリ社会において中国由来とされる いくつかの文化的事例について

A Case Study on Several Chinese-origin Matters in Balinese Culture

皆川 厚一
MINAGAWA Koichi

本研究ノートは共同研究プロジェクト「アジア祭祀芸能の比較研究」の一環として、東アジアの文化、とりわけ中国文化の東南アジアにおける伝播と影響、そしてその変容について、具体的な事例を挙げ検討する為のデータ整理および資料批判を目的としている。

対象地域としてはインドネシア共和国のバリ島を選ぶ。周知の通りバリ島は、イスラム教徒が圧倒的多数を占めるインドネシアにあって唯一ヒンドゥ教徒人口の多い島である。インドネシアの中で唯一バリ島だけがイスラム伝来以前のヒンドゥ＝ジャワ文化の伝統を継承している。同時に中国文化の影響を含むヒンドゥ以外の文化的事例も多く現存する貴重な地域である。

本研究ノートではそれらの文化的事例の中から3つをとりあげる。これらはいずれも現地バリ島の社会において「中国から伝わった」という認識が定説化しているものである。その「中国」が現中国のどの地域を指すのかは現時点では不明であるが、今後の調査と検証の過程でそれが明らかになる事を期待する。

中国起源とされる文化的事例

1) 中国銭

中国で鑄造された穴あき貨幣は紀元前後から広く東南アジアで流通していたとみられる。インドネシアでは特に13世紀以降、

東ジャワに興ったヒンドゥ王国マジャパイト朝時代に宋・明との貿易を通じて大量の中国貨幣が流通したとみられる。これら中国銭は当然、商い上の通貨として用いられていたわけであるが、歴史のある時点から、バリ島においてはそれが儀礼のアイテムとして変容し、その価値と重要性を増していった。

通貨としての機能を失った現在でも中国銭は冠婚葬祭の通過儀礼、とりわけ葬儀において必ず必要なアイテムとして珍重されている。この穴あき中国銭のバリ社会における意味と儀礼的機能を考察する。

2) バロン・ランドウン

バロン・ランドウンはバリ島民の祖先のトーテムであると考えられている。バロンは観光ショーのバロン・ダンスに登場する有名な獅子型のものでなく様々な形が存在する。それらの多くは虎、猪、犬などの動物をかたどっているが、中に人間型のものがあり、それがバロン・ランドウンと呼ばれる。

これは夫と妻の一对の人形で、黒い方が夫（雄）白い方が妻（雌）である。その妻の方が中国から来た中国人であると信じられている。すなわちバリ人は自らの先祖に既に中国人の血が入っていることを認めているわけである。その由来に関する伝説等を検討し、バリ島民の祖先に対する認識の

中にある「中国」を探る。

3) ガムラン・ゴング・ベリとパリス・チナ

バリ島南部のサヌール村ルノン地区とスマワン地区には中国起源とされるガムランの一種ゴング・ベリが伝承されている。このゴング・ベリはガムランの歴史系統分類の中では古楽の範疇に入る古いガムランである。一般的なガムランと異なり、編成中に旋律楽器はなく、銅鑼、太鼓、シンバルなどの打楽器を中心としたアンサンブルであり、儀礼の際にはそれに法螺貝などが加わる。

この音楽によって伴奏される儀礼が、パリス・チナ即ち「中国のパリス」と呼ばれ、トランスを伴う祭祀芸能である。これを伝承する人々はいわゆる華人・華僑ではなく、何世代もバリに暮らすバリ人でありヒンドゥ教徒である。この音楽と儀礼の由来を調べることでバリ社会の中の中国文化の古層を探る。

以上が本研究ノートで取りあげる事例であるが、各詳論に入る前に、インドネシアにおける中国および中国人に対する一般的な社会認識と問題点を説明しておく必要があると思われる。

近代におけるインドネシアと中国の関係

インドネシア共和国初代大統領スカルノは当初、対中国親和政策をとっていた。しかし1965年9月30日に発生した共産党クーデター未遂事件によりスカルノは失脚、代わって政権を掌握した第2代大統領のスハルトは反共政策を強行に打ち出し、共産党を非合法化し、中国との国交を断絶(1967～1990)した。その間大規模な共産党狩りや中国系市民(華人)への虐殺を含むあらゆる弾圧が合法・非合法的に行われ

た。

元来オランダ統治時代から有力な中国系市民は植民地政府の行政代行などを行っており、インドネシア人は彼らを搾取階級とみなしていた。そのことがこれらの事件の背景にあったことは否めない。

その結果、スハルト政権時代から中国系市民は自らの出自を隠すようになり、名前も中国名からインドネシア名に変更して住民登録をする者が多くなった。

1990年の国交回復以降、国内の反中国感情は幾分和らいできてはいるが、中国系市民たちは基本的に過去の経験への潜在的恐怖感を抱き続けている。このことがインドネシアにおいて中国人および中国文化に関する調査研究を困難にしている最大要因となってきた。

中国系市民(華人)の宗教

インドネシア共和国政府はその建国5原則の中で「唯一神への信仰」を謳っている。これは全国民が政府の認定する5種類の宗教(イスラム、カトリック、プロテスタント、ヒンドゥ、仏教)から1種類を選び信仰する権利・義務を定めたものである。即ちインドネシア国籍を有するものは上記の宗教のいずれかを信仰し、それはパスポート、住民票などの身分証明書に明記されるのである。したがって「無宗教」というステータスは許されていない。

インドネシアの中国系住民(華人)の大半は儒教 Confucianism(インドネシア語では Konfucu、もしくは Klenteng という)を信仰している。これはインドネシアでは仏教の一派とみなされているが、前述のクーデター未遂事件以降、政治的な弾圧が高まることで仏教への同化がより進化した。スハルト政権時代多くの中国系市民は名前をインドネシア風に変え、中国由来の

慣習を捨てて生活することを余儀なくされた。仏教をカモフラージュとして利用したわけである。この状況はスハルト政権の崩壊（1998年頃）まで続いた。

しかしこのような基本的社会状況の中で、バリ島では少し違った対中国反応が見られる、と筆者には感じられる。バリ島では中国系の血筋をもつと見られるヒンドゥ教徒が多数存在する。これらの人々は見かけ上、他のヒンドゥ教徒とまったく違いのない生活をしている。顔つきなどから中国系を想像させる人がいるが、住民票・旅券などはヒンドゥ教徒として登録されている。

またそれとは別に、バリ島にはかなり大規模な儒教寺院が数カ所に存在する。その信者はいわゆる華人であり、自分たちが中国系市民であることを自覚し、独自の慣習に従った暦で祭礼を定め、ヒンドゥ教徒とは異なる様式で礼拝をとりおこなう。

以下の章で詳しく述べることになるが、インドネシアと中国の関係が歴史的に最も急速かつ公的に発展したのは13世紀東ジャワにおけるマジャパイト朝時代の事であったと考えられる。その後イスラム勢力の進出によってマジャパイト朝は崩壊し、往時のヒンドゥ＝ジャワ文化はバリ島へと引き継がれた。したがってバリ島にはこのヒンドゥ＝ジャワ文化に根ざした中国文化への評価がまだ残っているのではないかというのが筆者の見解である。

この視点に立って前述の3件の事例について考察を進めていこうと思う。

1. 中国銭

1-1 中国銭の起源と展開

今日歴史的遺物としてインドネシアで多数発見される中国銭はウアン・ケペン uang kepeng、もしくはピス・ボロン pis

borong と呼ばれるものである。ウアン・ケペンはインドネシア語、ピス・ボロンはバリ語である。「写真1、2」これには中国から輸入されたものと、インドネシア国内で鑄造されたものの2種類がある。

バリの歴史に関する最も古い記録（9世紀）の中に既に中国銭に関する記述がある。当時インドネシア諸島ではボルネオ島北西部海岸地域（現在のマレーシア、サラワク州）に既に中国人社会が存在していた。宋代（960～1280）にはそこで多くの陶器工場が操業していたとされる。バリで発見されている中国銭で最も古いものは唐代（618～907）のものであることから、中国銭が7、8世紀には既にバリで流通していたという仮説を研究者はたてている。（Eiseman, 1990 p.114）

バリの中国銭は現在貨幣としては流通していない。しかしバリ＝ヒンドゥ教のあら

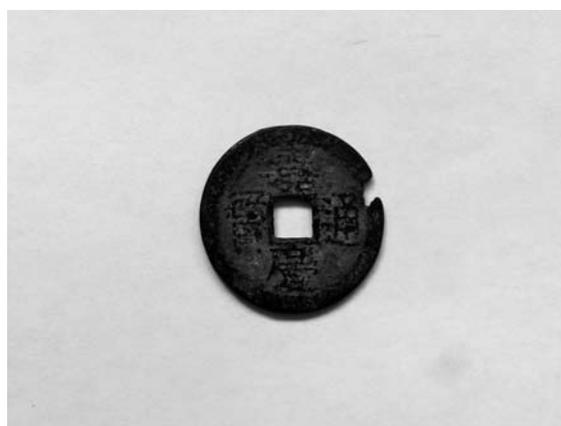


写真1 ウアン・ケペン(表)



写真2 ウアン・ケペン(裏)

ゆる儀礼のなかで供物に必要なアイテムとして使用され、市場などで日常的に売買されている。バリで使用される典型的な中国銭は直径 2.5cm、厚さ 1.0mm 前後、中心部の孔は正方形で対角線が 5.0mm 位。表側には漢字 4 文字があり、裏側の記載は様々である。通常の漢字ではない文字が書かれている場合もある。それら未確認の文字は古代ジャワ文字であるという説がある。

これらの中国銭はバリ島の村の市場で一束 200 個の単位で売られている。値段は品質の善し悪しによって 7000 ~ 9000 ルピアの幅がある。

これらの中国銭はすべてが中国本土で作られたとは限らない。インドネシア諸島では多くの中国銭コピーが鑄造された。特に東ジャワのダハ Daha が重要な地域であったといわれる。この中国銭を通貨として北宋時代の中国とジャワのマジャパイト朝、そしてインドを結ぶ三角貿易が盛んに行われた (14 ~ 16 世紀)。マジャパイト朝の中国との交易は公式には 1435 年に中止されたが、中国銭の輸入は 1503 年まで続いたといわれる。(Sidemen, 2002 p.48)

また中国銭の流通に関する近代の興味深い記録がある。マッズ・ランゲ Mads Lange というデンマーク人は 1839 ~ 1856 の期間バリ島のクタ地区で中国銭の輸入業を営み、巨万の富を築いたという。彼は購入した中国銭を使い、布、アヘン、金属製品、嗜好品、そしてバリ米を売買した。彼が今日サタツ satak と呼ばれる 200 個単位の中国銭綴りを考案したといわれる。彼は購入時の 2 倍の値段に中国銭のレートを設定し多大な利益をあげたといわれる (Eiseman, 1990 p.115)。

1-2 儀礼アイテムとしての中国銭

中国銭はバリ人の日常生活にとって便利で実用的な貨幣であっただけでなく、青銅という金属で作られていたため、バリ人にとって神秘的な力を有するものとして解釈された。伝統的にバリ人は金属の持つ超自然的な力に対する強い信仰心を持っていた。

例えば、寺院や集会所など社会的に重要な建築物の建前を祝福するために使われる供パンチャ・ダトゥ panca datu (鉄、銀、銅、金などで作られる) の中に中国銭を使用するようになった。

また中国銭は富に関連し、それをもたらすものとして理解されるようになった。それゆえ神々への供物に、花、饅頭、肉などと並んで供えられるようになった。またいくつかの供物ではその土台として使われる。銭の個数はそれぞれの供物で決められているが、その数の意味は不明である。

また、中国銭はいわゆる「福 (バリ語でウリップ urip) を授ける」アイテムとしても使われる。例えば重要な建築物を建てる時、プダギンガン pedagingan と呼ばれる供物が土台に埋められる。その中に中国銭が含まれており、それが建物の完全、安全、幸福を祈念するものとされる。

個人の礼拝ではクワンゲン kwangen というアイテムがよく使われる。これは花と中国銭一個をバナナの葉で 3 角形にくるんだものである。この中国銭が祈る個人に福を授けるものとされる。

中国銭は葬儀、火葬儀礼でも重要なアイテムである。亡くなった人の身長に合わせて作られた布製の人形ウクル ukur に多数の中国銭を縫い付ける。「写真 3」

また各家庭ではスリ・スダナ Sri Sedana という中国銭を多数縫い付けた人形をめでの儀礼 (主として結婚式、成人式) の時



写真3 ウクル

に飾る習慣がある。この人形も富と幸運をもたらすものと考えられている。バリのウク暦（30週210日を1年とする）にはこのスリ・スダナ人形の為の日（誕生日）が定められており、それは28番目の週の水曜日である。「写真4」



写真4 スリ・スダナ

また中国銭ほどではないが、陶器の皿もバリでは珍重される。特にデンパサール地域の寺院では建物の壁にこれらの皿を埋め込んでいる例が多く見られる。しかしこれ

らはオランダがバリで海外交易を始めた時（19世紀）を遡ることはないと思われる。

2. バロン・ランドウン

2-1 バロンとは

バリ島に限らずインドネシアでは、森羅万象のあらゆる生命体を守護するためのトーテム（地霊、精霊、祖霊を含む）を地域毎に各民族が所有している。それらは外来宗教の渡来以前からこの地域に存在する土着の信仰に根ざしていることは間違い無い。

バリやジャワではこれを一般にバロン barong と称し、その多くは何らかの動物の形をとっている。それらの動物は実在のものもあれば空想上のものもある。実在のものでは虎や獅子、猪などが多く見られ、空想上のものとされる代表はバリ島のバロン・ケツ barong ket である。「写真5」

バリ島では1970年代から外国人観光客の為の娯楽として「バロン・ダンス」と呼ばれる芸能が日常的に上演されている。これに登場するのがバロン・ケツである。通



写真5 獅子型バロン・ケツ

常は単に「バロン」と呼ばれる。バリ島の観光芸能ではこれがあまりにも有名になったためバロンといえば即バロン・ケツを指すようになってしまった。

だが観光と関わりのない一般バリ社会ではこれ以外に多数の異なるバロンが存在している。前述の虎、猪の他、犬、象、牛、蝶などがあり、その中で人間（祖先）を象徴するものがバロン・ランドウン barong landung である。「写真6」



写真6 バロン・ランドウン

2-2 バロン・ランドウンの起源

バロン・ランドウンの起源については複数のストーリーが錯綜する形で併存している。これらは史実に基づく部分と伝説の部分が混合して構成されており、時代設定にもかなりの幅がある。最も広く語られており、物語の脈絡も理解しやすいのは以下のようなものである。

2-2-1 起源伝説

紀元11世紀頃、バリ島にはスリ・ジャヤ・クスヌ Sri Jaya Kesunu と呼ばれる王がい

た。⁽¹⁾ 彼の領地は現在のバトゥール湖周辺のキンタマーニ Kintamani 高原一帯であった。

王には一人の妃と一人の王子がいた。王は慈悲深い政治を行い領民からの信頼も厚かった。

ある時、一人の賢者が中国からこの国にやってきた。その名をリエム Liem といった。この賢者は弟子にあたる若い中国人の女性を伴っていた。賢者リエムはその博識と学才によりすぐに王の相談役として重用されるようになった。彼は政治、経済、商業、農業、軍事などあらゆる分野のノウハウを王に伝授した。そのためスリ・ジャヤ・クスヌの王国はますます繁栄した。

一方、彼の王子マヤダナワは長ずるに至り皇太子の称号を受け王位継承者となった。しかしマヤダナワは邪な性格の人物であり、中国人のリエムが父王の側近に仕えることを好まなかった。またマヤダナワは神を信じず、皇太子の権限を乱用して寺院を閉鎖したり礼拝を禁止したりした。⁽²⁾ 息子を皇太子にしたことの過ちに気づいたジャヤ・クスヌは実の息子から王位継承権を剥奪し、その後マヤダナワを島の南部に追放した。

その後マヤダナワはその地で専制君主となり、恐怖政治を敷いて周辺の国と戦争を繰り返しながら領地を拡大させていった。彼の母親、即ちジャヤ・クスヌの妃はそのような息子の行状に心を痛め失意の内に他界した。⁽³⁾

妻を亡くしたジャヤ・クスヌは絶望にうちひしがれていた。そのような王の姿を見て、賢者リエムは彼の弟子の中国人女性と再婚してもよいのではと提案する。王は中国人女性との結婚を望んだ。彼女の名前はカン・チン・ウィ Kang Chin We といった。

カン・チン・ウィとの結婚後、何年もの

時が過ぎたが夫婦には子供ができなかった。マヤダナワを追放して王位継承者が不在だった王国は、大きな問題に直面していた。王は瞑想の行によって解決策を見いだそうと努力した。

その時、賢者リエムは次のような提案を王にした。王と王妃の二人に似せた大きな人形を作り、「年老いた王と若い中国人の妃」のストーリーを演じさせるように。

王の人形は肌の色が黒く、歯が鋭く出ている。一方妃の人形は若く、肌の色が白い中国人をあらわしている。

これが、現在のバロン・ランドウンの起源であるとされる。今日バリ島南部の地域ではカジェン・クリウォン Kajeng Kliwon⁽⁴⁾の日の礼拝でこのバロン・ランドウンが登場する。もしも住民の中で特に御利益を願うものがいた場合、その喜捨によってこのバロン・ランドウンの劇が上演される。多くの場合それは子宝を授かるための喜捨である。

2-2-2別の起源伝説

バロン・ランドウンの起源に関するもう一つ別の伝説がある。物語の背景はやはりスリ・ジャヤ・クスヌ王の時代であり、途中までは同じストーリーである。

中国人女性カン・チン・ウィと再婚の後、子供が出来なかった王は、子宝を授かるためにバトゥール湖の湖畔で瞑想の行に入る。瞑想中のある時一人の美女が王の前に現れた。それは絶世の美女あったため王は即その女性と恋に落ちた。しばらくする内、女性は王に結婚を要求した。王は既にカン・チン・ウィという妃がいることを隠し、その女性と結婚の約束をする。二人はしばらくバトゥール湖畔で暮らした。そのうち二人の間には一人の女兒が生まれる。

一方王の帰りを待つ妃カン・チン・ウィ

は、いつまでも王が帰らないのを不審に思い、バトゥール湖へいってみることにした。湖畔の王の瞑想所に着くとそこでは王と見知らぬ女性が女兒とともに暮らしていた。

怒ったカン・チン・ウィは王に詰め寄り、湖の女性も独身だと偽った王を責めた。そのように三人が喧嘩状態になったとき、湖の女性は突如女神に変身した。彼女こそバトゥール湖の女神だったのである。

女神は魔法によってこの二人の人間を巨大な人形に変身させ、これがバロン・ランドウンの起源となったという。

2-3バロン・ランドウンの分布と種類

バロン・ランドウンはバリ島の南部に多く見られる。特に首都デンパサル市とその周辺のバドゥン県 Badung には王と王妃を模した二体以外にも多くの種類のバロン・ランドウンがある。この地域は前述の獅子型バロンよりもバロン・ランドウンの方が一般的に見られる。

次に例としてあげるのはデンパサル市東部スムルタ村 Sumerta のプラ・ダルム寺院 Pura Dalem の場合である。⁽⁵⁾ そこには五体のバロン・ランドウンが祀られている。その種類と名称は以下の通りである。

- 1) ジェロ・グデ Jero Gede
スリ・ジャヤ・クスヌ王（地元ではスリ・ジャヤ・パングスと呼ばれている）を模した黒い人形。
- 2) ジェロ・ルー Jero Luh
カン・チン・ウィを模した白い人形。
- 3) プトゥリ Putri
王と妃の間に生まれたとされる王女の人形。
- 4) チュパツ Cupak
バリの古い民話に登場する主人公。大食漢で怠け者のキャラクター。

5) グランタン Gerantang

チュパックの兄。まじめで働き者のキャラクター。

「写真7」



写真7 右からジェロ・グデ、ジェロ・ルー、チュパック、プトゥリ、グランタン

これら五体のバロンは前述のカジェン・クリウォンの礼拝日には寺院内の倉から出され、参拝者と並び、祭壇に向かって礼拝する。このとき参拝者の中からトランス状態になる者が出ることもあるが、毎回とは限らない。また、前もって住民から劇の上演の依頼があったときは、村の僧侶が人形の中に入って寸劇を上演する。このときの劇のストーリーは歌舞劇アルジャ Arja あるいはチュパック民話からとられたものが多い。

2-4バロン・ランドウンの集会

バロン・ランドウンに限らず、あらゆるバロンの制作に使われる木材はポレ pole の樹から採られている。ポレの樹はシヴァ神からの授かり物（シヴァ神の子供）と考えられおり、バロンのような公的（私物でない）な人形の頭に用いられる神木である。通常ポレの樹はプラ・ダルム寺院の外庭に生えている。「写真8」

同じのポレの樹から作られたバロンは互いに家族であると見なされる。したがって定期的にその親であるポレの樹がある寺院



写真8 ポレの木

に里帰りし「親族会議」のような儀式をおこなう。もちろん話し合いをするわけではなく祭壇に向かって並び、共通の神＝祖先に対して人間と同様の礼拝を行う。

2-5バロン・ランドウンの理解

ジェロ・グデとジェロ・ルーの夫婦によって象徴されるのはバリ島民が祖先として認識する2系統の人種である。

即ち、肌の色が黒く鋭い歯を持ったジェロ・グデはマレー系（もしくはインド系ヒンドゥ教徒）の祖先の象徴であり、肌の色が白く柔和な表情を持ったジェロ・ルーは中国系の祖先の象徴である。

しかしこれがバリ島全体に共通する習俗であるかどうかは未明である。筆者の知る限りこのバロン・ランドウンは島の南部、それも海岸に近い地域に集中しているという印象がある。またこれはいわゆる「華人」の文化ではなく紛れもなくバリ＝ヒンドゥ教徒の文化のひとつである。このことは次に検討するガムラン・ゴング・ベリとバリス・チナについても共通する要素といえる。

3. ゴング・ベリとバリス・チナ

3-1 ゴング・ベリとバリス・チナの特殊性

バリ島には約 30 種類のガムランの演奏形態があるといわれている。ゴング・ベリ Gong Bheri はその中でも「古楽」と称されるグループに属する。「古楽」はその起源がはっきりわかっておらず、バリ社会形成のかなり初期から伝承されていると考えられるガムランのカテゴリである。ゴング・ベリ以外では、グンデル・ワヤン Gender Wayang、アングルン Angklung、ガンバン Gambang などがこのカテゴリに含まれる。

その中でもゴング・ベリは特に珍しく、その伝承地域も限られている。ゴング・ベリはデンパサール市サヌール村の、スマワン地区 Semawang とルノン地区 Renon 二カ所にのみ現存する。

バリス・チナ Baris Cina はこのゴング・ベリの伴奏で踊られる儀礼舞踊である。バリスとは「隊列」の意味で、通常複数の男性が列を作り、槍や刀などの武器を携えて踊る儀礼舞踊である。このバリス舞踊は非常に多くの種類があるが、バリス・チナはその名が示すとおりチナ (= China) 「中国の」バリスであるといわれている。しかし、この舞踊は中国系の寺院や華人社会とはまったく関係なくバリ＝ヒンドゥ寺院の祭礼時に上演される芸能なのである。

3-2 起源伝説

一般的に伝えられているこのバリス・チナの起源伝説は次のようなものである。大昔、ある中国の貿易船がサヌールの沖で難破し、海岸にうちあげられた。中国人の乗組員たちはその場にキャンプを張り、船の修理を行った。その修理の合間に乗組員たちは青竜刀で武装し隊列を作って軍事訓練のようなことをしばしばおこなった。それ

を見たサヌールの住民はそのユニークさに惹かれ、振りを真似してバリス・チナという舞踊を作ったという。

この伝説はあまりに発想が安易で、具体的な記録もなく、研究者には支持されていない。またその伴奏ガムランであるゴング・ベリの「ベリ」とはマハーバーラタの古代ジャワ語版に登場する武器の名前である、という記述が同サヌール村ブランジョン地区 Belanjong の石碑に見られることから、これは古代ジャワ語版の成立期であるマジヤパイト時代を起源とみるべきであるとする研究者が多い。

3-3 ゴング・ベリについて

前述のようにゴング・ベリはバリ・ガムランのなかでは古楽に含まれる。古楽には 3 つの系統がある。一つはアングルン、グンデル・ワヤンに代表されるスレンドロ音階の系統、次にガンバンに代表されるペログ音階の系統、そしてゴング・ベリに代表される銅鑼、シンバル、太鼓等の鳴り物打楽器で構成される合奏の系統である。中でもゴング・ベリは特定の音階を持たず、リズムの組み合わせのみで成立する音楽である。

楽器編成をみると銅鑼の形状に 2 種類あることがわかる。ひとつは他のガムランでも一般的にみられる鑼面中央にコブ状の突起がある銅鑼である。今ひとつは鑼面に突起がない平らな表面を持つ銅鑼である。このタイプの銅鑼はいうまでもなく中国の各種演劇の伴奏でよく用いられるタイプの銅鑼であるが、バリ島においてはこの銅鑼を用いるのはゴング・ベリのみである。

ゴング・ベリの具体的な楽器編成は以下の通りである。(Bandem, 1983 p.3)

1. ゴング・ベリ：バル Bar とベル Ber の一対。表面が平らな銅鑼。

2. クレンテン Klenteng: やはり表面が平らなやや小型の銅鑼。
3. クンダン・ブドゥグ Kendang Bedug: 樽型の太鼓。イスラム寺院で用いられるものに形状が似ている。
4. 法螺貝
5. 竹笛: 唯一の旋律楽器⁽⁶⁾
6. タワ=タワ Tawa-tawa: 中央に突起のある銅鑼。曲のテンポを決める楽器。
7. ゴング3個 Gong: 他のガムランでもみられる突起のある銅鑼。3個1セットで用いる。「写真9」



写真9 ゴング・ベリ、右側の2個が表面の平らな銅鑼

演奏される曲は次の通りである。

1. タブ・プテガッ Tabuh Petegak: 独立した器楽曲。
2. バリス・イレン Baris Ireng: 「黒のバリス」と呼ばれる。黒い衣装を着けた踊り手の伴奏曲。
3. バリス・ペタッ Baris Petak: 「白のバリス」と呼ばれる。白い衣装を着けた踊り手の伴奏曲。

3-4バリス・チナ

バリス・チナの儀礼はバリのウク暦ブダ・ウマニス・プランバカット Buda Umanis Perangbakat の日に行われる。これはウク暦第24週の水曜日にあたる。ウク暦は210日周期であるので、儀礼の日程は毎回太陽暦の日付とは、ずれていく。

儀礼はまず二頭の牛を生け贄に捧げることから始まる。これは通常のヒンドゥ寺院ではあり得ないことであるが、バリス・チナの寺院はヒンドゥ寺院であるにも関わらず牛を犠牲に捧げ、供物も豚肉を使わず、牛肉を用いる。寺院の住職に尋ねてもその理由はわからないらしい。昔から、そうしななければならないという慣習であるそうだ。(Rai, 2001 p.169)

その後、闘鶏が3ラウンド行われる。これは鶏の足に鋭い刀を装着して行うもので、闘って負傷した鶏の血が地面に落ちることによって地下の霊を鎮めることが出来るとされる。

その後、夕刻より檀家信者の礼拝が始まり、夜半頃にバリス・チナの舞踊が演じられる。筆者が最初にこの舞踊を見学した1984年当時、寺院内に照明は一切無く、この儀礼は漆黒の闇の中で行われた。もちろん肉眼では視認可能だが撮影は当時の機材では不可能な暗さであった。現在は寺院内に良好な照明設備があるらしく明瞭に記録された映像もインターネット上で見ることができる。⁽⁷⁾

舞踊は二つのグループが交代で踊る形式で演じられる。一つは黒い衣装のグループ、今ひとつは白い衣装のグループである。いずれのグループもその衣装はバリ舞踊の慣習的なものではなく、西洋風の上着にズボン、羽根のついたテンガロン・ハットをかぶり、手にはサーベル、もしくは青竜刀のような長い剣を持っている。植民地時代のオランダ軍のいでたちとも見える。一見してバリの寺院の祭礼に極めて似つかわしくないキッチュな出で立ちといえる。

この黒と白の集団が軍隊風の隊列を組み交互に踊る。その振り付けも通常のバリ舞踊の様式ではなく、剣を振り回す動きがどこか中国拳法、あるいはスマトラ起源の格

闘技ブンチャツ・シラットに類似するものである。

この二つのグループが交代で何回も踊るうちに、その踊り手のなかからトランス状態になる者が出てくる。彼はバリ語と中国語（といわれている）の混じった言葉で何事も叫び激しく暴れ、時に手に持った剣を自身の身体に突き立てる。もちろん他のトランス儀礼と同様、それで怪我をすることはない。

彼がトランス状態で叫ぶ言葉の中に村のコミュニティに対するメッセージが含まれている。それを傍らで僧侶が聞き取っている。これは他のヒンドゥ寺院のトランス儀礼でも同様である。それらのメッセージには儀礼の運営に対するクレームや、供物が十分に適切であったかどうかに関する評価が含まれている。後日、それは村の運営会議で検討され、次回の儀礼で実行されるのが普通である。

3-5 バリス・チナと他のトランス儀礼の比較

既に多くの研究者によってバリ島のトランス儀礼に関する研究がなされている。しかしバリ島の習俗が最初欧米の研究者に知られ始めたのは、いわゆる芸術村ウブド Ubud とその周辺の地域からであった。これは現在のギアニャール県に属しているが、この地域の王族が旧王政時代からオランダ植民地時代にかけて欧米人にたいして開放的であったことと関係がある。一方デンパサールやその周辺のバドゥン県、タバナン県はオランダの侵攻に対し強硬に抵抗した歴史を持つ。また特に目玉となる観光地も多くは存在せず、住民のホスピタリティも期待出来なかったため大量の外国人の来訪は一時代遅くなった。

したがってデンパサール周辺のバリ＝ヒ

ンドゥの儀礼はメディアによってあまり頻繁には紹介されず、研究対象となる頻度も少なかった。前述のバロン・ランドゥンもその一例である。バロン・ランドゥンはギアニャール県にはそれほど多数存在しない。

トランス儀礼に関しても、ギアニャール県の寺院の通常の祭礼でトランスが起こることはそれほど頻繁ではなく、またそれが起こる寺院も限られている。しかしデンパサールやタバナンでは、寺院の建立祭ではほぼ確実にトランスの儀礼がみられる。しかも大抵どの寺院でも普通に起こる。

これらのトランス儀礼はバリス・チナの場合と同様、二つのグループの交互の舞踊の中で展開される。一般的なヒンドゥ寺院のトランスは、男のグループと女のグループによるトランスの場合が多い。男性グループは槍などの武器を持って踊り、女性グループは花の供物を載せた盆や香炉を持って踊る。それを繰り返すうちにその中の数人がトランスになるのである。

バリス・チナの場合、二つのグループの衣装の色の対比であったものが、一般の寺院では男女の対比としてあらわれている。これらはいずれもバリ＝ヒンドゥの二元論的価値観・宇宙観を反映していると考えられる。即ち、神と悪霊、黒魔術と白魔術、善と悪、聖と邪、右と左、上と下、などの二元論におけるバランスとシンクレティズムの中に人間の生きる道を見いだそうとする姿勢であるといっていよう。

結論と今後の研究展開

今回とりあげた中国起源とされるバリ島の文化的事例は、いずれも13世紀～16世紀のマジャパイト朝時代の対中国外交の結果、生じた文化的事象と深い関係があることがわかる。それらがヒンドゥ＝ジャワ文

化の後継者としてのバリ＝ヒンドゥ社会の中に残っていると見えるだろう。

したがって今後の研究展開としては、マジヤバイト時代の記録のなかに中国銭や陶器の貿易についてのものであるかどうかを調べることがまず考えられる。また現在のジャワ島に類似の事例が現存するかどうかも逐次機会をみて調査する必要があるだろう。

一方、中国側の同時代資料、おそらく宋、明の時代のインドネシアとの交流に関する資料を中心に調べる必要があるだろう。

また宗教に関しては儒教と並んで道教 Taoism の影響も十分考えられるのであるが、今回の研究ノートではその点が未明である。道教の陰陽理念はバリの二元論と深く通じるところがあるように見えるが、その具体的接点が見つかるかどうか焦点になるだろう。

参考文献

- Bandem, I Made, *Ensiklopedi Gambelan Bali*, Denpasar, Akademi Seni Tari Indonesia Denpasar, 1983
- Eiseman Jr., Fred B., *Bali-Sekala & Niskala vol. II*, Periplus, 1990
- Rai, S, I Wayan, *Gong*, Bali Mangsi Press, 2001
- Sidemen, Ida Bagus, *Nilai Historis Uang Kepeng*, Larasan-Sejarah, 2002

注

- (1) 6世紀という説もある。
- (2) スリ・ジャヤ・クスヌ王はこのとき大乘仏教を信仰し、一方マヤダナワは小乗仏教 Theravada を信仰していたとする説もある。
- (3) マヤダナワを主人公とする伝説には他の説話も存在する。
- (4) バリのウク暦で15日に一度巡ってくる日。この日は環境のなかの超能力的なパワーが最高レベルになると信じられており、ヒンドゥ教徒は夜、最寄りの寺院に参拝する。
- (5) ドゥルガ神を祀る「死者の寺院」。火葬前の

仮埋葬墓地在隣接する。黒魔術の力がもっとも強い場所とされている。通常各村にひとつ存在する。

(6) 1984年の筆者の調査ではこの竹笛の存在は確認されなかった。

(7) <http://www.youtube.com/watch?v=zuQ1Hypp8n4>